

初めてのことであったので準備が大変だった。描きちらしたスケッチ・ブックから出展作品を選ぶ作業、何点並べるか、搬入陳列の人集め、折詰と2合瓶の用意、案内状の作成、宛先の選択、搬入の方法、会場の受付、来客の芳名帳、作品の値段、売れた場合の送先ノート作成などなどである。

搬入陳列の肉体労働は東経大時代、罵詈雑言^{ばりざんぼう}を浴びせかけた学生達が10人以上も駆けつけてくれた。大助かりだった。6号から1号まで60点ちかくを並べたてたからだ。私はおおざっぱな指示を与えただけで、成行きを眺めていた。わいわいがやがや收拾がつかぬが見えたが、1時間もすると自然、リーダーが生れてきて、てきぱきと事が運んだ。2時間はかからなかったと思う。折詰めは来客の数が不確かなので止めた。代りにそのころは珍しかったテレホン・カードを用意した。出展作品の中から3点を選んで合計400枚を注文した。2合瓶も不便なので、ビール大瓶と1升瓶とウイスキーを揃えた。このころ缶ビールが既にあったかな。憶えていない。

一番悩んだのは、作品の値段をどう決めるかだった。1号いくらにするかで、細君との間に決着がつかなかった。私は1万円を主張したが、細君は1000円だと言う。足して2で割っても5000円がほどである。「売って儲けるわけじゃあないでしょ。500円だっていいじゃないですか」「馬鹿野郎！ この芸術作品を評価しねえのか。1万円で買う奴がいなけりゃ、そいつは観る目のねえやつだ。もちろん、売って儲けるなんて気は毛頭ねえさ。だあがなあ、500円、1000円じゃあ画が可哀想じゃねえか」「わかりましたよ。それにしても、あなと言う人は、長生きしますよ、きっと」

丁度このころ、網干さんが伊香保で長期展を開かれていた。私は1晩泊りで出かけた。すばらしい淡彩画が処狭し^{ところせま}と陳列されていた。値段を見るとp6号が一律7万円だった。帰宅して、細君にこの話をした。「当然でしょ、7万円では安いと思うわ、10万円でも安いわ。あなたの画とは違いますよ」と言いやがった。

私は「御前さんの意見はわかった。値段は俺が決める」といって、あろうことか、大明神を真似て少し遠慮したとはいえ、6号6万円、1号1万円とした。

「おい、何点ぐらい売れるかなあ」

「そうねえ、5点位は御義理で買って下さる人があるかも知れないわ」

「そうだな、来てくれるだけでも有難てえものなあ」

こんなことで、第1回目の個展は始まった。これが、どうなったか。開会中にどんなトラブルがあったか。どんな事件があったか。については、その後の開催を含めて書き直したい。今回は、だいぶ飲んだ。ウイスキーのダブル、5杯かな6杯かな。

(平成14・08・)